

2016年4月20日 Vol.22

人手不足を補う企業が活躍する時代

熊本の大地震発生からはや1週間が経過しようとしています。この間余震が多発し多くの皆様が避難生活を余儀なくされ、大変な日々を過ごされているとの報道に接し、憂慮致しております。改めて今回の大震災に遭われた熊本や大分の皆様に心からお見舞い申し上げる次第です。私は1年ほど前のある企業を訪ねるために熊本に出張し、熊本城の石垣を眺めた記憶があるので余計に驚きと落胆を禁じ得ません。

その企業というのは熊本に本拠を置く平田機工(6258)のことですが、同社のIR担当執行役員からは2回にわたり震災の影響についてメールにて連絡を頂戴しました。第1回目は14日の震度7の大地震発生後のメールでしたが、その際は影響がない旨の連絡でした。第2回目は本震後の連絡で工場の操業や業績面には支障が出ていないものの、従業員の方が行方不明になっているとのこと。今回の前震と本震さらにはその余震に見舞われた熊本地方の惨状が伝わってくるものでした。同社にもこれ以上の被害が及ばないことをお祈りします。

平田機工の株価は多くの投資家に支えられ大地震の発生にも関わらず堅調に推移していますが、業績の堅調さとともにスカラ型ロボットの開発企業という点も見逃せないポイントかと見られます。日本国はモノづくりに国民のパワーを集中してきたことで世界トップクラスの経済体制を構築してきたのですが、現在は少子高齢化への懸念が叫ばれています。総人口の減少もさることながらこの先に予想される生産年齢人口の減少への対応が求められています。その切り札とも言えるロボット活用はますます進むことが考えられます。それは車の世界にも押し寄せており、自動運転が当たり前になる時代が10年以内にも到来しようとしています。車のエンジンや半導体などの生産エンジニアリング企業である同社の活躍の場もますます広がりを見せるに違いありません。

モノづくりの企業に留まらず、ICTの発展で変貌を遂げようとしている企業の事例は様々に見られます。昨日開催された自動翻訳サービス会社のロゼッタ(6182・東証マザーズ)もまた未来を先取りした企業と言えます。職人技で行われてきた翻訳・通訳の業務がインターネットやAI、ビッグデータ技術を活用した自動翻訳の世界に変わることが想定される中で昨年11月に東証マザーズに上場した同社は独日技術の開発先行で未来への成長を夢見ています。

先日は囲碁の対戦でもコンピュータが世界的なプロを負かすという出来事がありました。ベテランの職人技をICT技術によって自動化する事例は今後も

東京 IPO 特別コラム

ますます増えてくると見られます。それに関わる新たな成長企業の活躍が株式市場でも大いに話題になるものと考えられます。少子高齢化時代の中で予想される人手不足を補い発展する新たな ICT 企業の登場は投資家の心を躍らせてくれそうです。

(東京 IPO コラムニスト 松尾範久)